

野戦重砲兵第二十一大隊部隊略歴

野戦重砲兵第二十一大隊
森第八一三一部隊

年月日	概	要
田五 七五	軍令陸甲第二十四号に依り、野戦重砲兵第二十一大隊臨時動員下令	
自 七三	動員完結	
自 八一	佛印進駐作戦の警備	
至 十六		
自 九五	佛印国境鎮南開通過	
自 十三	佛印国境鎮南開通過	
自 十七	東山附近の警備	
至 四九		
自 四三	東江作戦の陽動に伴ふ従化南方地区の戦開に参加	
至 五三		
自 五三	東山附近の警備	
至 六六		
自 六六	南支黄浦出帆	
至 八一	西貢上陸	

457~

2167

年月日	概	要
自天 七八	南部備進駐作戦に参加	
至 八五		
八十	西貢出發	
八四	奠浦上陸	
自 八天	東山附近の警備	
至 八三		
自 九四	四区 北江作戦参加	
至 十三		
自 十四	広東東山附近の警備	
至 十四		
至 十六		
至 十八	支那事変勤務に続き大東亞戦に参加	
自 十五	馬來作戦(二月八日より十五日に至る 新嘉坡攻陥戦)に参加	
至 二五		
至 二五	南支虎門出帆	
一七		
一三	泰國「シンゴラ」上陸	
一五	泰馬來國境通過	
二六	昭南島齋正工作警備	

~460~

2168

9 の内 ヒルマ

自 十六	至 八三	自 七六	至 六五	自 四元	至 四元	自 十一	至 九三	自 六一	至 五三	自 六十一	至 六十	自 三三	至 三三	自 四九	至 三三
断作戦第三期に参加		断作戦第一期に参加		断作戦第一期に参加		断作戦第一期に参加		断作戦第一期に参加		断作戦第一期に参加		断作戦第一期に参加		断作戦第一期に参加	

~461~

2169

年月日	
概 要	<p> 三三 二六 自 五 至 八五 冊三 六五 </p> <p> 断作戦第三期に於て、第三十三軍司令官より、部隊管調を受く。 「又イクテイラー」会議に際し、第三十三軍司令官より、部隊感状を受く。 「シヤタン」作戦に参加 宇品上陸 復員 </p>

#62~

2170

第九師団 第一架橋材料中隊部隊略歴

年月日	概	要
昭三 九七	動員下令	
九九	編成完結	
九三	神戸港出帆	
十四	南支白那士湾に上陸	
自 十六	広東攻略戦並に東江渡河作戦参加	
至 十三		
自 十三	惠州附近の警備並に掃蕩戦参加	
至 十二		
自 九	広東附近の警備・勤務並に掃蕩戦参加	
至 四		
自 一三	海口攻略戦並に、南渡江渡河戦斗及海口附近の警備・勤務	
至 三六		
自 三元	広東附近の警備掃蕩戦並に、花縣討伐戦参加中広東東北方向外にて、兵一名戦死	
至 十二		
自 十三	南寧攻略戦参加中那間墟及大寺圩附近にて、中隊長及兵一名戦死	
至 三二		

463~

2171

年月日	概	要
自 五、三 至 五、一六	翁茨作戦参加中広東にて、兵一名戦病死	
自 一、三 至 三、三	漢陽作戦参加	
自 三、四 至 六、三	広東附近の警備中、下一兵二、戦病死、兵一戦死	
自 三、三 至 八、三	福州反撃作戦、福州附近の討伐作戦、福州撤退作戦に参加中、大湖鎮及頭革附近にて、下一兵一戦死、福州にて兵三戦病死	
自 五、十 至 五、二五	東江作戦に参加	
自 八、三 至 十、三	広東附近の警備勤務、広東にて、兵一戦病死	
自 十、八 至 十一、三	香港攻略参加中沙田頭にて、兵二戦死、広東にて兵一戦病死	
自 十一、三 至 十二、五	九龍附近の警備勤務	
自 十二、五 至 一、三	九龍半島国境地区附近警備勤務	

~464~

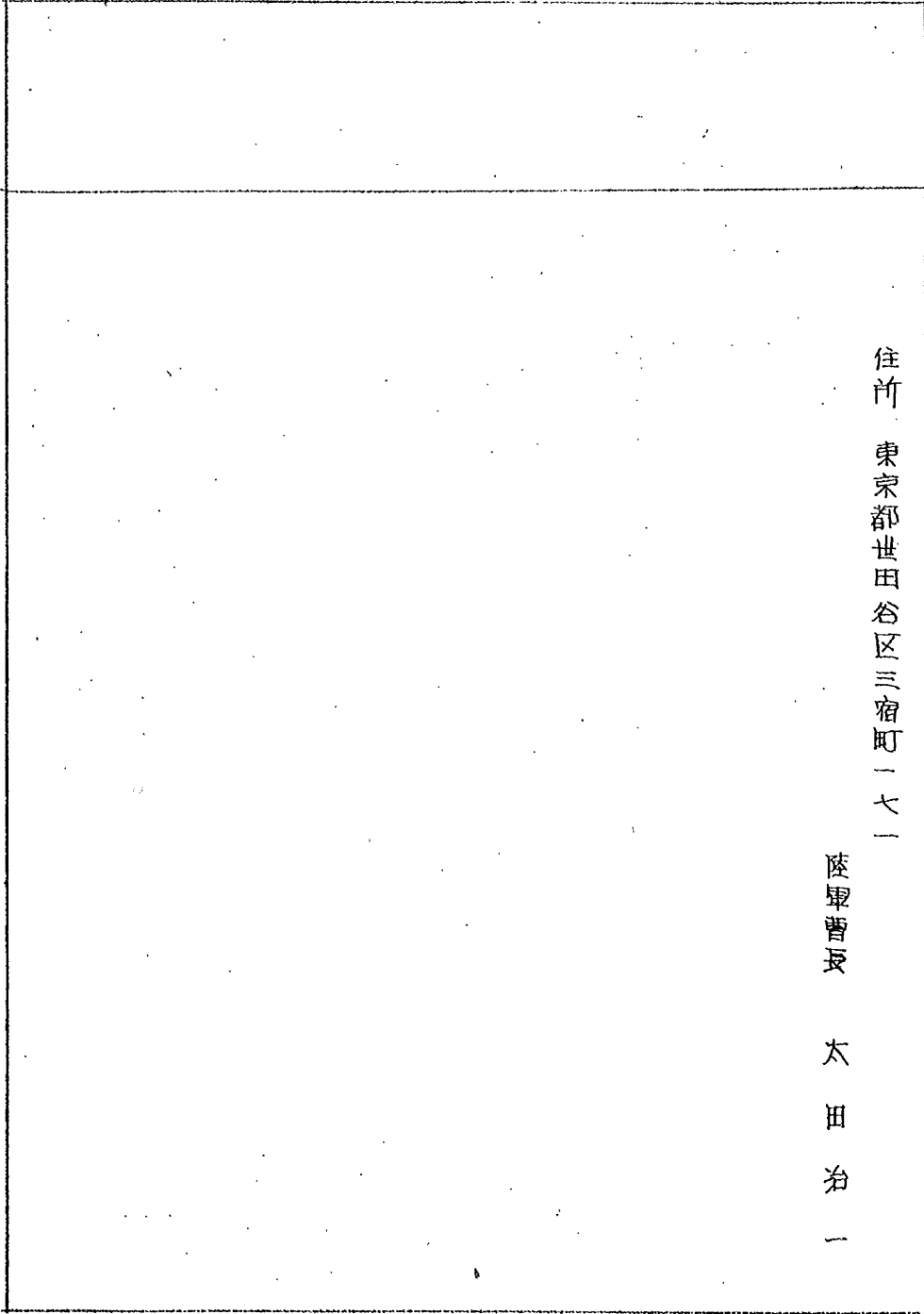
2172

自 七 五	南海方面に転進中。比島「ダバオ」にて。兵一戦傷死
至 八 三	「ニューギニヤ」作戦中。「ニューギニヤ」島。「キルワ」。「ブナ」。「
自 八 三	「ニューギニヤ」作戦中。「ニューギニヤ」島。「キルワ」。「ブナ」。「
至 八 七	「クムシ」河口附近の戦斗にて。将校三。准士官二。下士官二。兵一。八。計一四六戦死。負傷入院せるもの約五名。比島「ダバオ」にて。戦死兵一。戦傷死兵一。
自 十 十	緬甸方面転進中。下二戦死。兵三戦傷死
至 九 四	遠征軍及撃作戦。八号作戦参加中。龍陵附近の戦斗にて下二。兵三戦死
自 四 元	断作戦（ホーラー期よりホーラー期）参加中。芒市中寮附近の戦斗にて。兵九戦死
至 七 五	龍陵附近の戦斗にて。下二。兵一戦死。瞰町附近にて。下二。兵一戦死。
自 七 六	南坎附近にて。下五。兵二戦死。其の他下二。兵一戦死。兵二戦傷死。下二。兵六戦溺死
至 四 九	兵六戦溺死
自 四 十	克作戦参加中下七。兵四戦死。兵一戦傷死。下二。兵八戦溺死
至 八 四	終戦
自 九 三	泰緬国境通過
至 十 一	「シヤム」国。「バンダラ」に於て。渡河作業及荷役作業従事。一部「ナコ

~465~

年月日	概	要
至三、三五	ンナヨークL集結地に前進	
三五	現地復員下令全員才百ニ野戦道路隊に転属	
三十	復員完結	
	終戦後の戦死死者下士官一四、兵三	
	歴代部隊長名	
	陸軍大尉(輔)	南 美正
	陸軍中尉(輔)	畑尾外喜雄
	陸軍大尉	古森弘志
	陸軍大尉	辻 正
	部隊事情精通者	
	住所 畠山縣東礪波郡高瀬村北市二六三八	陸軍准尉 岩 嶋 忠 雄
	石川縣鹿島郡御祖村字高島ラノ部四八	陸軍准尉 伊 駒 信 一
	石川縣珠洲郡寶立町字鶴島一九字七	陸軍曹長 佐 野 好 治

466~



住所 東京都世田谷区三宿町一七一

陸軍曹長 太田 治一

~467~

2175

独立自動車第六十一大隊

見オハ八五六部隊 少佐 寺田 豊
 終戦後の集結位置 シヤム国 ナコンナヨーク

年月日	概	要	編成地	兵出身地
昭天 七八	朝オ一七編五号に依り、臨時編成下令、歩兵オ五十八連隊へ豊橋中部オ六十二部隊へに於て編成		朝鮮	三重縣
七八	臨時編成完結		平塚	福岡縣
七八	朝鮮馬山港上陸、京城師団長の隷下に入られめりる。		鹿島縣	
十	朝鮮応召の充足要員を合し、輜重兵オ二〇連隊に於て編成完結、釜山港出發		其の他少	
自 一十	馬未作戦参加		教完全	
至 三九			国各県	
自 四三	緬甸及支那奥南省に依りて作戦に従事			
至 八四				
至 七十	部隊長異動 旧少佐 内島孝男 新大尉 寺田 豊			
六五	北部緬甸作戦の功に依り、オ十五軍司令官より、オ二六師団〇〇部隊として威状授與せらる。			

458

2818

2176

の内 七五マ

昭元 二三	才三十三軍司令官より、昭和十九年四月以降各作戦の功に依り、賞詞授與せらる。
二三	才五六師団長より、才五六師団輜重才五六連隊。部隊として、賞詞を授與せらる。
一十	才五六師団。部隊として南方軍総司令官より
三二	才三三軍司令官より、断作戦の功に部隊感状を授與せらる。
五六	才五六師団配属部隊として、南方總司令官より、賞詞授與せらる。
六一	才五六師団長より配属部隊として賞詞授與せらる。
三	内地帰還のため「バンコック」出港
六五	補復上陸
六五	復員出給
六七	
自六 八画	指揮隷属関係及共の他交還
至 三三三	京城師団長隷下
自 三三	
至 三六	才二五軍司令官隷下

469

8719

2177

外
レ
マ

年月日	概要
自 昭 天 三、七 至 八、二、六	カ十五軍司令官隷下
自 二、八 至 九、四、九	カ五輸送司令官隷下
自 四、九 至 三、六、七	カ三十三軍司令官隷下
自 六、三、九 至 九、八、三	カ五六師団長指揮下
自 三、三、三 至 三、三、三	右同じ
自 三、三、三 至 三、五、六	カ二十二師団長隷下

~470~

年月日	概	要	死傷損耗	給與	衛生
自昭三十一 至 二五	馬未並新嘉坡攻陥 作戰に参加		戦死 病死 傷死 一	円滑 円滑	良 好
自 四三 至 七三	「ピルマ」進攻作戰に参加 新嘉坡攻陥後反転シ 恭園「ラーヘン」より「バック」山脈を越ヘ「ト ング」より「カ五六師団配属部隊として「ラシ オ」隘町「ミイトキーナ」攻陥並に進襲作戰に参 加		戦死 傷死 一	円滑 円滑	良 好
自 六一 至 七三	怒江作戰参加 先進輜重(自動車輜重)へ五六丁一中隊及四輪起 動車分隊隸下ニケ中隊 其幹とする現地人 馬を 以て臨時編成せる大隊一隊 ハニ〇〇頭計駄馬一 ニ〇〇頭)となり腹起北才地区に於けるカ五六師 団及才十八師団一部に對する戦場補給及兵力転用 に任ず		戦死 病死 一	円滑 円滑	良 好
自 三一 至 四六	「ウ」号支作戰に参加		戦死 病死 一	円滑 円滑	良 好

~111~

2179

耳月日	概要	死傷損耗	給興	衛生
自昭五四元 至 七五	遠征軍反婁作戰に参加。オ十八師団はミイトキ ーナ附近に於て、優勢なる敵空地挺進部隊を婁 減中部隊は主力を以て、オ十八師団に対する緊急 弾薬の輸送、引渡後反転オ五六師団の勝北地区作 戦部隊の兵力輸送並戦場補給に任ず。時までに雨期 に入り荒廢せる道路は泥濘化し、橋梁は敵に爆破 せう水、空地の敵は隨所に我前進の妨害する等 最悪の狀態を克服しオ一線兵団の戦場補給の遺憾 ならしむ。	戦死二 戦死二 戦死一 傷死一 戦死一 傷死一 戦死一	内地す の迫送 杜絶は アミバ 赤痢 流行す	天然痘 パスト アミバ 赤痢 流行す
自 七六 至 七五	断作戦オ一期に参加。怒江の渡河せる敵雲南遠征 軍十五ヶ師団へ(カ) (カ)は龍陵騰越地区に兵力を 集中し反攻猛烈をきわめ、部隊はオ三十三軍直轄 輸送隊となり、隸下三中队 Sgt ニ中队を併せ、指 揮 Sgt (一部) 20 (五部) 40 (一部) の兵力転用 並補給輸送に任ず。	戦死五 傷死二 戦死一		
自 十六 至 二三	断作戦(オ二期)此の間主としてオ三三軍直轄輸 送隊となり隸下一四ヶ中队 臨			

472

自 三三	至 二二〇	断作戦（オ三期）	時ニケ小隊指揮下五ケ中隊を併せ指揮し前線兵団（580 490 180 20一部）の集積輸送並に兵力転用、軍需品の後送、SPの転進に伴の後方整理、トエナシジョン地区の燃料搬出強行輸送等、不眠不休の努力を傾倒す。	死二 傷一	糧秣被服類を被用す	
自 四九	至 二二三	断作戦（オ四期）	此の間地上及上空よりする敵の妨害は燃烈を極め殊に敵飛行機の兵站線破壊其の極に達す	戦死四 傷死九	一切現地自活による	引続く業務と
自 五〇	至 五五	断作戦（オ二期）	オ五六師団は敵雲南遠征軍と接戦を続行レ四月上旬オ一線はコラシオレコシンポールに転進を完了、又敵英印軍はコメークテララ奮取後コタウンギーレ及コトングレに侵透し有力なる謀略部隊を以て	戦死四 傷死八 不明六	軍需価値下落	薬物の不足に依り
自 八四	至 八八				せよ所多し	熱帯熱マリア多発

473

年 月 日	概	要	
昭 三 八 四	<p>我輸送路の妨害に任しあり。此の間、部隊は燃料補給の杜絶により、動物糞重（牛革部隊）に改編し一部を以て、代燃自動車を製作し、ヤ一線兵団の後方機動並補給を遺憾なからしむ。</p> <p>終戦より帰還迄の行動</p> <p>終戦の大詔発、部隊は緬甸国「カレン」州、「ナムパレ」に在り</p> <p>「シヤム」国集結のため、泰緬甸国境通過</p> <p>「シヤム」国、「チエンマイ」北方四料に集結</p> <p>部隊保有兵器返納</p> <p>南恭機動のため、「チエンマイ」出發</p> <p>「シヤム」国、「ナコンナヨーク」日本軍集結地に到着</p> <p>朝鮮人「ヤ」名、現地召集解除せらる</p> <p>内地帰還のため、「バンコック」出港</p> <p>浦賀上陸</p> <p>復員のため、召集の解除</p>		
十 三			
一 二 八			
一 二 七			
一 二 〇			
一 三 五			
三			
四 七			
六 五			
六 五			
六 三			

シ
レ
マ

特設自動車第九中隊略歴

昆一〇四二三部隊

中隊長中尉

富樫

宣

年月日	概	要
昭二八、五、三	編成完結	
自 五、三	コスマトラ島防衛	
至 八、二		
八、三	イベラワン港出発	
八、六	昭南港上陸	
自 八、三	輸送業務並に昭南島警備	
至 元 三、二		
三、三	轉進のため昭南港出港	
三、五	仏印西貢上陸	
三、三	仏印泰国境通過	
四、五	泰緬甸国境通過	
自 三、三	転進に伴ふ輸送業務及びウルギ作戦に参加	
至 四、六		
四、九		カミ三軍隷下に入る

年月日	概要	要
昭和 四元 至 七五	「ハ」号作戦及遠征軍反撃作戦に参加	
自 七六	断作戦第一期に参加	
至 十五	断作戦第二期に参加	
自 十六		
至 三三	断作戦第三期に参加	
自 三三		
至 三三		
自 三三	「シ」州及「マンダレー」沿線方面 危作戦に参加	
至 五三		
自 五四		
至 八五	「シ」タン「レ」作戦に参加	
自 八五	終戦	
九二	停戦條約調印式完了	
十一	集結のため 緬甸国「クバン」県「セマトウエ」駐屯	
三三	移駐のため 同地出發	
三三		
二五	「バグ」県「バヤジ」に着	

3
の
タ
ニル
ク

~476~

<p>四三三 六四 六三 昭三 五二二 五三八</p>	<p>「メーカー」ラ「着 「ミンガランド」者 蘭費着 蘭費港出發 守品港上陸、復員完結</p>
<p>八 五三</p>	<p>編成及編成人員以下事項は（別紙部隊略歴の続）に記載あり 部隊略歴（別紙部隊略歴の続とす） 特設自動車第九中隊長中尉 富 樫 宣 見一〇四ニ三部隊 編成 軍司令陸甲第三十一号及陸軍機密第二一九号に依り、特設自動車第九中隊を スマトラ島「メダント」にて編成す 中隊長陸軍中尉 富 樫 宣 （留守担任部隊 千葉縣三宮町陸軍自動車隊） 編成定員 中隊長 大尉又は中尉 一 中尉又は少尉准尉 三</p>

4771

心の外 ドルマ

年月日	概	要
昭九 三三	補充	計 六
八 三三	陸軍機密第五〇〇号に依り、独立自動車第五九大隊より、下士官及兵四〇名 輜出輜属及内還入院他隊勤務	
三 八八	陸支密ヲニ五四五号に依り、兵一内地帰還(高原) 疾病病院船に依り内地帰還兵ニ (神崎、高崎)	
三 一五	右 同 兵一 (米倉)	
三 五	傷病 右同 下士官一 (高橋)	
三 八五	オニ野戦輸送司令部に輜属 持校一 (中尉) (斎藤)	

478~

2186

年月日	概	要
昭三 十 二 九	疾病に依り、コナークテラレオ一〇七兵站病院に兵一名入院（王置） 疾病に依り、コナークテラレオ一〇七兵站病院に兵一名入院（並木） 傷病に依り、コノンコンレオ五五師団オ一野戦病院に兵一名入院（江波戸） （以上四名消息不明）	
三 四 二 五	傷病に依り、蘭賣オ五ニ印彦中央病院に兵一名入院（緬甸国残置）（高池） 病（病）死 生死不明 戦死 戦病死 九 生死不明 一	
内地帰還者 中隊長以下 八八名		

1179

独立速射砲第十三大隊部隊略歴

昆第一〇七一七部隊

- 一代 陸軍少佐 小倉 弘 成
- 二代 陸軍少佐 柏 端 久 三
- 三代 陸軍大尉(代理) 提 正 典

年月日	概	要
昭六十八	部隊は軍令陸甲第七九号に依り、才十五軍隷下(才十八・三三・五六師団才五野戦輸送司令部、基兵団の一部及独立速射砲才六中隊)の一部を以て、緬甸国妙明に於て編成完結す。	
元 四 九	編成完結の日を以て、主力(才一・二中隊員)は才十八師団に配属を命ぜらる。才三中隊は才十五軍直轄部隊として、才十五軍司令官の指揮に入らしめらる。	
二 四 二 四	才三三軍司令官の隷下に入る。才三中隊は依然才十五軍司令官の指揮に入らしめらる。	
	編 成 地 兵出身別(縣名)	緬甸国妙明 福岡縣 佐賀縣 熊本縣 大分縣 宮崎縣 栃木縣 長崎縣 群馬縣 東京都 茨城県

14の内
ビルマ

至	自	至	自	至	自	至	自
十五	七六	七五	四元	四六	十八	四元	十八
断作戦才一期		八号作戦		「ビルマ」防衛並に「ウ」号作戦	参加せる主要なる作戦（戦斗）	カ十五軍司令官の隷下に入る	編成装備指揮隷属関係及其の変遷
四八	不可	四三	不可	五三	五三	五三	五三
不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可

- 埼玉県 千葉県 三重県 奈良県 新潟県
- 福島県 宮城県 山形県 秋田県 岩手県 青森県 山梨県 長野県 北海道
- 愛媛県 香川県 山口県
- 沖縄県 朝鮮 大阪府 富山県 岩手県
- 静岡県 岐阜県 鹿児島県 神奈川県
- 和歌山県

~187~

独立有線中一〇八中隊部隊略歴

中隊長 宮地 末男

年月日	概	要
昭五 六五	軍司令陸甲中四九号に依り、満州国牡丹江電信中十七隊隊に於て、編成完結 中ニ通信隊長の指揮下に入る	編成完結
六五	屯営出發急據任地(緬甸)に向い行動開始す	
七一	釜山到着	
七元	釜山港出帆に至る間劇係疾患(基の大部分は、細菌性赤痢)猖獗し多数の入院患者を出し、内十一名は菌保有者にして、釜山陸軍病院に入院のため、留守業務担任部隊なる、電信中二隊隊に転属す	
七三	客船うらる丸に乗船、十九隻の船団を組み一路昭南に向い航行す。 唐津港に寄港の際一名腸疾患のため、小倉陸軍病院に送院すると共に、電信中二隊隊に転属の手続を了す。 入院のため本隊と行動不能となり転属せるものの官氏名左記の如し	
	陸軍伍長 酒 巻 武 司 陸軍主計伍長 福 島 登	
	同 田 中 國 三 郎 陸軍上等兵 上 村 鉄 二	
	同 春 藤 喜 久 陸軍特等上等兵 太 田 忠 一	

484

ハルマ

<p>陸軍一等兵 野村 保 陸軍一等兵 原田 義男 同 草野 仁 同 中辻 登美一 同 羽賀 藤 保</p> <p>(以上十一名は釜山に於て)</p> <p>陸軍一等兵 谷 考次 (唐津に於て)</p>	<p>昭五、 八三</p>	<p>昭南上陸「ブキテマ」兵舎に、駐留嗣後同地附近の警備。此の間炎熱酷暑の下而も長途の輸送業務は必身の疲労大にして、伝染病発生の誘引となり、此がため、多数の腸胃係伝染病患者を出し、兵二名の戦病死者を出せり。 緬甸に転進列車に依り、緬甸國「ラシオ」に向ふ</p>	<p>九</p>	<p>同國「フメロード」駅に於て、敵兵十余名の襲撃を受け、其の役下せる人馬殺傷弾並に機銃掃射に依り、兵二名戦死者、兵九名の戦傷者を出せり</p>	<p>十</p>	<p>任地「ラシオ」著爾末「三」軍の隷下に入り、当時軍戦司令部前たりし同地を中心に「ラシオ」あるいは、中華民國雲南省芒中(当時「五」六師団戦司令部位置)附近にありて、通信線保守並に通信連絡に任じありたる東北通信隊より其の任を継承す</p>	<p>十五</p>	<p>継承完了す。一〇〇とす</p>	<p>自 三</p>	<p>前述任務に基き芒市—畹町—「ラシオ」附近に於て、断作戦「三」期及「三」期作戦に参加す。本期間に於ける人的損耗戦死兵「三」、戦病死八名とす</p>	<p>至 三</p>
---	-------------------	--	----------	--	----------	---	-----------	--------------------	----------------	---	----------------

~185~

年月日	概 要
自 三、二 至 四	<p>「ラシオール」「シポール」「メイメウ」「モンミット」附近に於て、断作戦 中三期に参加す。本期間に於て所在不明者五名を出す。所在不明となる前後の 状況は別紙所在不明者調査の如し。</p>
自 四 至 五	<p>本期間に於ける人的損耗は戦死兵四、戦傷兵一、戦源死兵一名を出せり。</p> <p>「ホーポン」「ロイコウ」附近に於て、克作断中一期参加</p>
自 五 至 八	<p>本期間に於ける人的損耗 戦死兵一、戦源死兵一名を出せり。</p> <p>「ロイコウ」「モーチ」「ケマピユール」「シラム」国 「クンユアム」 附近に於て克作断中二期参加。本期間中所在不明者五名を出す。所在不明とな りたる前後の状況は別紙所在不明者調査の如し。</p>
自 八 至 三、三 三、五 三十	<p>人的損耗本期間に於ける戦源死者下士官一名、兵三名</p> <p>「シラム」国「チエンマイ」「ナコンナヨーク」に在りて、終戦業務に従事す</p> <p>本期間に於て、戦源死せるもの下士官三名、兵四名</p> <p>富士参編カーヤ九号に依り、現地復員のため中二通信隊本部に転属</p> <p>復員完結</p> <p>尚戦(傷源)死者月別階級別内訳は別表の如し</p>
歴代部隊長名	<p>陸軍大尉 宮 地 末 男</p>

の 外

486

年月日	概要
	<p>部隊事情精通者</p> <p>住前 岐阜県恵那郡武並村竹竹七ニ番地戸 陸軍大尉 宮地 未男</p> <p>青森県南津軽郡大鰐町大字大鰐 陸軍准尉 五十嵐 重夫</p> <p>長野県松本市大字北架志袋町一五四番地 陸軍准尉 宮沢 益 雄</p> <p>所在不明者調書は(別紙)見班に於て、業務処理上不要なるため、日比班に 保管しあり。(昭和ニニ午十月十一日現在)</p>

1871

2195

独立有線才一の九中隊部隊略歴

才三三軍独立有線才一の九中隊長

内海

啓

年月日	概	要
昭元 五、四	滿成下令	
六、元	隊長以下三一〇名 滿州出發	
十五	瀋陽着	
自 六、元	輸送中釜山門司マニラに於て	兵格一名入院 其の後内地部隊に転属 昭南に
至 十五	て兵一名入院其の位不明	
自 十六	断作戦中傷死兵一名 戦死兵一名	
至 三三		
自 一、一	断作戦中 戦死兵一名 戦死兵二名 逃亡兵一名(逃亡後捕虜)	
至 四九		
自 四十	断作戦中 五名入院其の後不明 戦死兵五名	
至 六三		
	トングー附近に於て 下士官兵二名	
	ピマー縣シムウゼン附近に於て 兵三名	
	生死不明六名 入院其の後不明	

2282

石の内 七五

自 六四 堅作戦中 戦死兵二名 戦病死兵二名 転属二名 十五名入院其の後不明
 至 八五 兵一名入院患者(元隊長) 附添として今遺其の後不明
 自 八天 戦病死兵一名 下士官、兵十三名入院後送、其の後不明、帰還従進運動要買
 至 八三 としして准士官一名帰還済、伊繩縣出身兵二名帰還のため出発其の後不明。

歴代隊長名
 大尉 麻生 勝 栄
 大尉 内海 啓

隊事情精通者

住所 鹿児島縣鹿児島市平之町七八番地

陸軍大尉 内海 啓

熊本県上益城郡龍野村大字中横田目野一〇〇二

陸軍准尉 田上 逸 雄

489

部隊略歴

中三三軍独立有線中隊長 上田次郎

年月日	概	要
昭五 六五	滿州國向島省向島電信ヲニテ七聯隊に於テ編成完結	
六六	將校七 准士官一 下士官三〇 兵二七二 計三一〇	
六七	屯營出発	
七八	兵一名電信ヲニ聯隊補充隊に転属せしむ	ハ於 釜山入院のため
七九	釜山港出帆	
八〇	内司上陸	
八一	内司港出帆	
八二	昭南港上陸	
八三	續甸国並ニシヤン州	「ラシオ」に到着
八四	「ラシオ」附近に於テ	断作戦ヲ二期に参加
八五	「ラシオ」附近に於テ	断作戦ヲ三期に参加
八六	右期間に於テ	戦死兵八 戦病死 下士官一 兵二 計十一 外ニ
八七	生死不明一	

~490~

年月日	概	要
自三 至三	「シポール」附近に於て、断作戦ヲ四期に参加（本期間に於て、戦死下士官三	
自 至四、九	「タウンゼー」附近に於て、断作戦ヲ一期に参加	
自 至四、十	断作戦ヲ二期に参加	
自 至五、五	断作戦ヲ二期に参加	
自 至五、三	断作戦ヲ二期に参加	
自 至八、四	「ケマビュー」——「テエンマイル」間裸線條の構成作業に任じ、同線による 通信業務に従事	
自 至八、五	「通信実施は「チエンマイル」——「ランパン」間を含む」 此の間に於ける戦病死兵ニ三、下士官二、戦傷死兵一、計ニ六	
自 至三、三	暹羅國に於て、断戦業務に従事 此の間に於ける戦病死、准士官一、下士官二、兵六七、計七〇	
自 至三、四	兵一名を「通信隊本部」に転属せしむ。	
自 至三、五	義参謀才三〇名（富士参謀才一、八九名）に依り、現地復員才ニ通信隊本部に 転進（入院後の連絡不能者、輸送途中に於ける、比島兵二、昭南兵二、 作戦中の入院者にして同上兵一、計五を含む）	
自 至五、二	戦病死兵一	

オニ通信隊本部部隊略歴

オ三十三軍(オニ通信隊本部)

オニ通信隊長 土生洋平

年月日	概	要
昭元 六五	滿州國向島省向島に於て、編成完了	
六六	編成人員 将校一六、下士官二〇、兵二六 計六二	
六七	緬甸國に戦進のため向島出發	
七八	門司出帆	
八八	昭南上陸	
十三	緬甸國「ラニオ」に着	
自 十三	緬甸國「ラニオ」附近に於て、断作戦オニ期参加	
至 三三	上記期間に於ける戦死者 将校一	
自 三三	緬甸國「シポール」附近に於て、断作戦オニ期参加	
至 四九	首兵一	
自 五三	緬甸國「ケマピエ」附近に於て、断作戦オニ期参加	
至 八四	河畔に於ける断作戦オニ期及「シッタ」上陸戦に参加	
	終戦時に於ける人員 将校一四、下士官二〇、兵二三	

年 月 日	概	要
昭三 十	同日以降、富士参編計 五七 ヲ五七号及ヲ一三五号に基き、通信諸部隊より転入 昭和二一年五月一日現在に於ける転入者 将校以下 四四三名	
九十	上記以降、ヲシヤムレ国、ヲチエンマイレ、ヲランパンレ及ヲナコンナヨ クニ於て、終戦業務に従事	
三三 三五	養参編ヲ三〇号(富士参編ヲ一七九号に依り隸下、独立有線ヲ一〇八中隊 同ー〇中隊及独立無線ヲ一〇三小隊を現地復員、ヲニ通信隊本部に転属	
三十	編隊完結 繰人員 将校以下 八九四名	
六二	暹羅國ヲナコンナヨクニ出發	
六六	盤谷出帆	
六〇	浦賀上陸	
六三	復員完結	
歴代部隊長名	小佐 金 正 雄 大尉 興 田 辰 馬 小佐 土 生 洋 平	

ク
の
外
ピ
ル
マ

~194~

独立無線隊一〇二小隊部隊略歴

カ三三軍独立無線隊一〇二小隊長 伊藤久男

年月日	概	要
昭和六 自 六 至 九	満洲より、緬甸に転進輸送 輸送「朝鮮釜山」に於て、兵一戦死	
自 十 至 三	満洲より、緬甸に転進 断作戦「ラミオ」附近に於て、下士官一戦死	
自 三 至 五	断作戦「バーモ」北方附近に於て兵二員傷するも治療す 断作戦「インドウ」附近に於て、下士官一戦死	
自 五 至 八	断作戦「ヤメセン」附近に於て、兵 三戦死 断作戦「タンゼーク」附近に於て、兵 一戦死 断作戦「ケマピュー」附近に於て、下士官一戦死	
歴代部隊長	大尉 伊藤久男	

18 の 内 ヒルマ

部隊事情精通者

住所 三重県四日市八王子町二九二番地

陸軍大尉 伊藤久男

兵庫県川辺郡六瀬村餘倉樋子一六

陸軍准尉 織田実

京都市東山区大和大路通五条九

陸軍准尉 小川秀一

~497~

2205

部隊略歴

ヲ三三軍独立無線カ一〇三小隊長 伊藤高治

年月日	概	要
昭五 六五	滿州風龍江省米家坎電信ヲ十八連隊に於て編成完結	
六五	將校一、下士官一〇 兵 四六	
七五	屯營出発	
七八	兵二名、電信ヲ二連隊補充に転属せしむ (於 釜山)	
七九	釜山港出帆	
八六	昭南港上陸	
十〇	彌岡ヲラシオレに転進	
十二	ヲラシオレ附近に於て、断作戦ヲ二期に参加	
至 三三	ヲラシオレ附近に於て、断作戦ヲ三期に参加	
自 三三	シポル附近に於て、断作戦ヲ四期に参加	
至 四九	下士官一名 独立歩兵ヲ四五大隊に転属(四月六日)	

~498~

2206

年月日	概	要
自昭三、四、十 至 五、元	タウンデ附近に於て、克作戦ヲ一期に参加	
自 五、三〇	モ一子附近に於て、克作戦ヲ二期に参加	
自 八、四	上期間に於て、兵一名戦死 下士官一 兵二名戦病死	
自 九、二	「シヤム」國に在りて、終戦業務に従事	
至、三 三、四	上期間に於て、兵三名戦病死	
三、五	義参編ヲ三〇号(富士参編ヲ一七九号)に依り、現地復員ヲ二通信隊本部に 転属 (下士官一 兵六をヲ三、三軍通信隊に配属中にレテ、部隊に未到着な り)	
歴代部隊長名 部隊事情精通者	大尉 伊藤 高治	
住所	愛媛県東春日井郡勝川町大字春日井字辻山七	
秋田県仙北郡大森野村入澤御宿字宿八二	陸軍軍曹 入谷 尚二	
陸軍曹長 有藤 芳郎		
大阪市此花区傳法町北二丁目一六	陸軍軍曹 東崎 賢	

独立無線第104小队略歴

第333軍独立無線第104小队

年月日	概	要
昭元 十 十	滿州より緬甸に派遣	
自 十 三	断作戦才二期参加中	緬甸国「ハーモ」州「カインタック」附近に於て
至 三 三	下士官一 兵一名戦死	
自 三 三	「ラミオ」附近に於て	断作戦才三期参加
至 三 三		
自 三 三	断作戦才四期参加並「メイクテ」ラ「会戦」に参加	
至 三 三		
自 三 三	克作戦参加中緬甸国「ビンマ」附近に於て	下士官一 兵二戦死
至 五 三	行方不明下士官一、兵五	
自 五 三	「ミッタ」ン「会戦」中	参加中終戦に至る
至 八 五		

歴代部隊長

陸軍大尉

加 勝 勝 正

~500~

19 の内 ビルマ

	部隊事情精通者 住所 東京都世田谷区玉川世田町六八三番地 池田乾治才 陸軍大尉 加藤 勝 正
--	--

~50/

2209

歩兵第五連隊部隊略歴

年月日	概	要
昭三 九 元	長崎県大村市勸買岩誌	
十九	門司港出発	
二五	杭州巷金山衛城附近に上陸戦斗	(損耗其の他不明)
二六	南京に向ふ作戦	
二七	亭林鎮、机窪鎮、嘉善、嘉興、湖州、玄徳、寧王、蕪湖、杭州附近の戦斗	(損耗其の他不明)
二八	上海出発	
二九	白耶士瀆 上陸作戦	(損耗其の他不明)
三〇	玄東に向ふ作戦 惠州増城附近の戦斗	(損耗其の他不明)
三一	四月作戦 派潭墟東洞附近の戦斗	(損耗其の他不明)
三二	夏季作戦 (廣東省増城北方附近)	(損耗其の他不明)
三三	翁英作戦 (廣東省翁英附近)	
三四	翁深英徳附近戦斗 (損耗其の他不明)	
三五		

502

2210

年月日	概	要
自五 一、三	賓陽作戦（広西省賓陽附近）	
至 二、九	南寧賓陽附近戦斗（損耗其の他不明）	
自 三、一	海南島掃蕩作戦（損耗其の他不明）	
至 三、三	福州附近作戦（才三大隊のみ）	
自天 四、二	東江作戦（聯隊主力、才三八隊欠）	
至 九、四	急作戦（マレー東海岸コロンタンに上陸作戦）出動下令	
自 五、五	黄浦港出發	
至 五、五	急作戦中止となり、コタペトに上陸	
自天 一、九	馬末作戦 戦死将校二 下士官約一〇	
至 一、九	負傷将校五 下士官約二〇	
自天 一、九	「エンダール」附近戦斗 「メルシン」北方三科	
至 一、九	道標附近の戦斗 戦死将校一 下士官兵約一〇〇	
自天 一、九	負傷将校一〇 下士官兵約二〇〇	
至 一、九	「ジヨボール」水道渡河戦斗 戦死将校なし 下士官、兵五	

年月日	概	要
自 二、九 至 二、五	「シンガポール」島攻略作戦 戦死将校約一〇 下士官兵約三〇〇 負傷将校約一〇 下士官兵約三〇〇	負傷将校なし 下士官兵 三
自 四、一 至 四、一	聯隊主力（「オニ」大隊欠） 緬甸進攻作戦 緬甸進取作戦 「エジン」附近の戦斗 戦死将校約一〇 下士官約七〇 負傷将校約一五 下士官兵約一〇〇	
自 五、一 至 五、一	「キヤウセル」附近の戦斗 戦死将校なし 下士官約一〇 負傷将校 五 下士官約二〇	
自 五、二 至 六、十	緬甸南「シヤン」州划定作戦（「損耗殆どなし」） 潜入英印軍撃滅作戦（緬甸北部附近）	
自 二、四 至 三、三	「チンドウイン」河 「イラワシ」河畔戦斗 戦死将校 三 下士官 約四〇 負傷将校 五 下士官 約五〇	
自 八、十一 至 九、三、五	ウ号作戦（雲南国境「ブ」コン「グ」ナイ「河」畔附近 北和ビルマ奪回を企図する雲南遠征軍及米支聯合軍に対したゞ雲南国境に	

ル
の
ハ
ヒルマ

自 七、六	至 二、三	断作戦	ナニカンレ附近の戦斗	戦死将校 一五	下士兵 五〇〇
自 四、三	至 七、五	ナニカンレ附近の戦斗	負傷将校 二〇	下士兵 六〇〇	
自 三、五	至 四、九	ナニカンレ附近の戦斗	戦死将校 七	下士兵 一〇〇	
自 四、三	至 七、五	ナニカンレ附近の戦斗	負傷将校 一五	下士兵 一〇〇	
自 四、三	至 七、五	ナニカンレ附近の戦斗	戦死不明 八六		
自 四、三	至 七、五	ナニカンレ附近の戦斗	負傷将校 七〇	下士兵 二〇〇〇	
自 四、三	至 七、五	ナニカンレ附近の戦斗	戦死将校 四〇	下士兵 一五〇〇	

1505

20の外
ビルマ

年月日	概	要
自 三〇 至 八二 九 三 七 三	<p>「ナンパッカ」附近の戦斗 戦死将校なし 下士兵二 負傷将校 下士兵 五</p> <p>「マングレー」沿線方面厄作戦 「メイクテイラ」 「ピヤウベ」 「ドゥグ」 附近の戦斗)</p> <p>「ビルマ」奪回を企図する優勢なる機甲部隊を有する 英印軍に対し劣弱な る装備を以て各所に侵略阻止戦を展開したるも夜の有する戦車に對しては 殆んど無力の状態で各所を突破蹴踏せられ收拾すへからざる状態を現出せるこ と度となり 戦死将校 二 下士兵 一〇〇</p> <p>「シッタ」作戦 戦死将校 五 下士兵 二〇 負傷将校 一五 下士兵 四〇</p> <p>捜査数は、資料皆無なるに付推定概数なり</p> <p>緬甸国「チャイト」に於て、武装解除</p> <p>宇品上陸 復員完結</p>	<p>歴代部隊長名 陸軍大佐 野 副 昌 徳</p> <p>同 竹 原 三 郎</p> <p>同 岡 田 博</p>

~506~

2214

年月日	概	要
	<p>福岡縣久留米市梅満町朝邊 陸軍大佐 近藤 義孝</p> <p>福岡縣八幡市熊手町一丁目三七八 陸軍大佐 山崎 四郎</p> <p>佐賀縣佐賀郡東興菅村下古賀一三三四 陸軍大尉 徳久 正美</p> <p>長崎縣長崎市出雲町七九 陸軍大尉 山口 壽</p>	

2
8
7
E
H
L
L
L

~507~

2215